

(学校行事)

「すべての子どもが安心して活動できる学校行事のあり方を研究する」

～ つながる ひろがる 心の居場所 ～

大阪市立福小学校 研究部

## 1. 研究主題設定の理由

本校では『豊かなところをもち、進んで学ぶ子の育成』を教育目標に、「認め合い、助け合う子」「自ら学び、正しく判断する子」「強いところとからだにきたえる子」をめざす子ども像とし、日々教育実践に取り組んでいる。そして昨年度、研究主題を「すべての子どもが安心して活動できる学校行事のあり方を研究する」とし、副題を「～ つながる ひろがる 心の居場所 ～」として学校行事のあり方を研究してきた。安心して活動できる学校、一人一人の居場所がある学校になるために、子どもと子どもだけでなく、福小学校に関係するすべての人がつながる「なかま体験」、自然や社会・さまざまな文化と出会う「ほんまもん体験」、そして「なかま体験」と「ほんまもん体験」を通して得ることができる「かんどう体験」を三つの柱として既存の学校行事の見直しと実践を行った。学校行事を「事前・当面・事後」の3場面と考え、それぞれの段階における話し合い活動を充実させることにより、「聞く力」「話す力」「話し合う力」「自他の考えの違いを見つける力」など自らを豊かに表現する力を培い、自主的・実践的な態度が育つと考えた。子どもたちだけでなく教職員も学校行事の事前と事後を意識した取組を進めることができた。今年度も昨年度の研究主題を引き継ぎ研究を進めていくが、「たくさんの学校行事の中から、どれに取り組みばよいか悩んでしまう。」という昨年度の反省を受け、今年度は「たてわり班」単位で子どもたちが主体的に活動する全校遠足に重点を置いて取り組むことにした。「事前」にループリックをしっかりと立て、「当面」の異学年交流をし、「事後」の振り返りをする。「何のためにこの活動をするのか。」「成功させるためには自分はどうすればいいのか。」をしっかりと考え、交流することで主体的・対話的な活動となり、深い学びになると考える。

## 2. 研究の視点

(1) すべての子どもが安心して活動するための学校行事の工夫

- 「たてわり班」を毎年編成し直すのではなく固定化することで、子ども同士がお互いをより深く理解し、主体的に活動できるようにする。
- たてわり班が第2の学級となるよう、各班に一人以上の担当教職員を配置する。
- 主体的に行動できるリーダーを育成する。

一人一人の子どもの活躍の場を設けることで自己有用感を高めて自信をつけさせるとともに、異学年集団の中で活動することによってお互いを思いやる心情を育て、違いを認め合うことができると考えた。また、積極的に「人と関わりたい」という意欲を高めていくことが子どもの社会性を育成することにもつながると考えた。子どもが安心して自分の思いを話し、友だちの意見も尊重して聞くことができる学級と学校を目標として、『主体的・対話的で深い学び』を実践する活動の場を構成してきた。

(2) 事前・当面・事後の各指導過程における工夫

- ループリックを取り入れ、子どもたちがめあてとリンクした到達目標を立てることができるようにする。
- めあてやループリックの確認と、自らの学びを深めることができるしおりを作成する。

子どもたち自らがめあてを意識し、たてわり班活動を評価する指標としてループリックを活用した。つまり事前の活動で行事のめあてをつかんだ後、めあてを達成するために何

ができたらいいか、また、それに向けてどのようにすればいいか、といった具体的な到達目標（ルーブリック）を設定できるように支援した。ルーブリックを設定する場面では、「具体的であること」「わかりやすいもの」「班のすべてのメンバーがルーブリックを達成できるもの」に留意するようにした。

S めあてが達成できるための手立てよりもさらに上の手立て

A めあてが達成できるための手立て

### 3. 研究の進め方

- 学校行事の特質と子どもの発達の段階を踏まえ、事前・当面・事後の効果的な指導のあり方を工夫し、自主的、実践的な活動を重視した集団活動を構築する。
- 昨年度の反省をふまえ、学校行事を絞ることにした。全学年で取り組む学校行事を「夏の集い」「全校遠足」「卒業を祝う会」の3行事とし、その他の学校行事にも「事前・当面・事後」を意識した取り組みを進める。行事ごとに事前・事後の振り返りカードを書くことで、一つ一つの行事に丁寧に取り組めるよう、また次年度の改善につなげる。

1学期に取り組む「夏の集い」は学校行事ではなく児童会活動だが「全校遠足」や「卒業を祝う会」を成功させるために重点をおいて取り組む。

### 4. 研究の成果と今後の課題

#### （1）研究の成果

- 異学年交流であるたてわり班活動を意図的に学校行事や児童集会に取り入れ、全教職員が一貫した指導を行うことで、子どもたちの交流が活発なものとなり、関わり合う喜びを感じ、絆が強まった。
- 準備が十分にできるよう時間を確保することで、子どもたち（特に高学年）が主体的に取り組める活動になった。また、振り返りの時間も必ず確保したことで、自分たちで乗り越えたことが、自分たちの自信へとつながった。
- どんな力を身につけさせたいのか、何のための交流活動なのかを改めて共通理解することで、全教職員の意識が高まり、関わり合う喜びを感じ取らせることができた。

#### （2）今後の課題

- 異学年交流を通して、新たな人間関係を構築することができつつあるが、学校全体として、進んで異学年交流ができているとは言い難い。たてわり班活動だけでなく、休憩時間にも自然に声をかけ合い、遊べるような関係を築いていくことを目指したい。
- 今年度、福小学校として初めてルーブリックに取り組んだ。「めあて」と「ルーブリック」、「目標」などを明確に使い分けることは難しく混在してしまった。今後も全教職員で共通理解をし、他校の取り組みも参考にしながら、取り組みを進めていきたい。
- 毎年やっている行事であっても、昨年通りで取り組むのではなく、子どもの実態の他、地域や保護者の思いや我々教職員の教育観などから、新鮮な目で学校行事を見直し、改善を図っていかなければならない。